

め, epidermoid の術前診断にて Lt. subtemporal approach を用い手術を施行した. 腫瘍は硬膜外に存在し, 硬膜内への進展は認められなかった. 三叉神経 V2 は内側前方に圧排されていた. 腫瘍は軟らかく, 内部は白色でもろい角化物質を認めた. また正円孔の拡大を認め, 腫瘍の attachment は正円孔の板間であった. 病理所見は, epidermoid であった.

epidermoid は小脳橋角部や錘体骨先端に好発する. 正円孔に発生する epidermoid は我々が渉猟した範囲内では報告がない. 一方, 近年拡散強調 MRI は epidermoid の診断に有効であると報告されている. 本例もこれに合致する所見を呈していた.

21 特異な MRI 所見を呈した epidermoid の一手術例

久下 淳史・嘉山 孝正・櫻田 香
園田 順彦・斎藤伸二郎・中里 洋一*
山形大学医学部脳神経外科
群馬大学医学部第一病理学*

【はじめに】epidermoid は, MRI の T1 および T2 強調画像のみではくも膜嚢胞との鑑別がしばしば困難であったが, 拡散強調像にて高信号を呈することが明かとなり, この所見が疾患特異的所見なものとして用いられている. しかしながら, 今回, 特異な MRI 所見を呈した epidermoid の手術症例を経験したので, その画像所見および手術所見に関して若干の文献的考察を加え報告する.

症例は 64 歳, 女性. 初診時の MRI で, 左小脳橋角部に T1 でやや高信号, T2 では低信号の径 3cm, 前橋槽に T1 および T2 で高信号を呈する径 2.5cm, 右小脳橋核部には T1 で等信号, T2 で低信号を呈する 2cm の腫瘤をそれぞれ認めた. これらの腫瘤は拡散強調画像では高信号は呈さず, 術前診断 dermoid にて手術を行った. しかしながら術中所見では, 腫瘤は部位により暗褐色や xanthochromic な内溶液を含む嚢胞で内部に緑色の垢様物を含む部分と, 典型的な epidermoid cyst の wall の所見を呈する部位が混在しており, 病理

組織学的には著明な角化を示す重層扁平上皮と一部上皮下にヘモジデリンを含む xanthogranuloma 様の所見を呈する epidermoid であり, 特異な MRI 所見はこのヘモジデリンが関与したものと考えられた.

【まとめ】epidermoid の中にも, 本症例のごとく拡散強調像で高信号を呈さない xanthogranulomatous な腫瘍の場合があり, 診断の際には注意すべきものと考えられ報告した.

22 頭蓋内 chordoma の再発に伴う DNA コピー数異常の変化: 3 例報告

佐々木輝夫・荒井 啓史・阿部 深雪
別府 高明・小笠原邦昭・小川 彰
岩手医科大学脳神経外科

【目的】頭蓋内 chordoma は組織学的には良性腫瘍であるが, 実際は完治困難であり, 臨床上の悪性腫瘍である. しかし, 比較的稀な腫瘍のため分子生物学的検索の報告はほとんどない. 我々は comparative genomic hybridization (CGH) を用いて, 頭蓋内 chordoma の初発時・再発時の DNA コピー数異常の変化について検討した.

【対象・方法】chordoma 3 例の初発時・再発時組織 (6 検体) を対象とした. 正常リンパ球・腫瘍組織より DNA を抽出した後, nick translation 法にて各々を Spectrum Red, Spectrum Green で標識し, DNA probe を作成した. 両 probe を正常染色体標本上で競合的に hybridize させ, CCD カメラで画像を取り込み, ソフトウエア上で解析した.

【結果】DNA コピー数異常は平均で初発時 10.3 個, 再発時 16.0 個と再発に伴い増加した. 全例で初発時より 13 番染色体長腕 (13q) の DNA コピー数の減少 (loss) を認め, 再発時 2/3 例で新たに 22 番染色体長腕 (22q) の loss を認めた.

【結論】組織学的には良性に分類される腫瘍であるが, DNA コピー数異常は多様であり, さらに再発に伴う変化も認めた. また, 13q loss が chordoma における生物学的な特徴の 1 つと考えられた.